

2 章

第29回NADT (National Association for Drama Therapy) 大会印象記

岡本 直子
(立命館大学)

アメリカで初の黒人大統領が誕生した翌日の2008年11月6日から9日の4日間、NADT (National Association for Drama Therapy 米国ドラマセラピー協会)の第29回大会がカリフォルニア州サンフランシスコで開催された。ドラマセラピーとは演劇的手法を用いて対象者の問題解決や心的成長を援助する技法である。本大会にはドラマセラピーに携わる250名もの実践家や研究者が米国を中心として世界中から集った。

6日はプレカンファレンスで、9件のワークショップと1件のパフォーマ



ンスが行われた。あいにく、評者は校務の関係でプレカンファレンスには参加できなかったが、参加した方々の話では非常に有意義な内容だったとのことである。

7日から9日の本大会では、午前7時から午後10時半にわたって、ウォーミングアップ5件、ワークショップ40件、フォーラム3件、パフォーマンス3件、集会、総会、レセプション、基調講演、余興など盛りだくさんのプログラムであった。複数が同時並行で進んでいたため、ここでは評者が参加し体験したものについて述べていきたい。

1日目は朝7時からのヨガに参加した。ヨガで始まる大会は評者にとって初めてであり新鮮であった。ヨガの後にオープニング・セレモニーが開かれた。プログラムでは1時間も時間が設けられていたため大会事務局のスピーチなどが目白押しなのかと思いきや、アイスブレイキングがなされた。「自分のファーストネームと同じアルファベットの人達とグループになって」、「自分と同じ星座の人達とグループになって」、「同じ年代の人とグループになって」、「犬派、猫派、両方派、どちらでもない派のどれかに分かれて」などの指示で皆が会場を動き回りお互いに挨拶し合い、気がついた時には皆が笑顔で打ち解けていた。

その後は各自ワークショップに分かれた。ワークショップは2時間程度のものから1日がかりのものまであり、評者はこの日は1日がかりのワークショップ、D. Wiener氏の“You Can Create and Run Successful Experiential Workshops!”に参加した。このワークショップはワークショップを成功させる技術を講義とロールプレイを通して学ぶ、ワークショップのためのワークショップであった。休憩をどのタイミングでどれ位とるか、タイムマネジメントをどのように行うか、などのかなり具体的な内容であった。後半では参加者がワークショップを行うなかで困った体験を出し、それを全員で再現し、Wiener氏がスーパーヴィジョンを行った。ワークショップのファシリテーターの要件として「完璧である必要はないがsincereである必要はある」との氏の言葉が印象的であった。

2日目の午前中はN. Fedder氏、D. Spangler氏、L. Canfield氏の“Creating

Musical theatre with Youth”に参加した。ミュージカル制作を通して青少年の人格的成長を促すプロセスがDVDで紹介された。その後、参加者が小グループに分かれてミュージカル制作をし発表した。非常に限られた時間であったにもかかわらず発表の準備をし、わからないところは即興的に演じきってしまうところはさすがにドラマセラピストの集団だと感心した。

お昼は協会の表彰式とR. Emunah氏の基調講演が行われた。氏は本学応用人間科学研究科と提携しているCIIS (California Institute of Integral Studies) のドラマセラピープログラムのディレクターで、アメリカのドラマセラピーの生みの親とも称されている人物である。講演では25年にもわたるドラマセラピストの教育経験に基づき、ドラマセラピーの過去、現在、そして未来について語られた。

引き続き行われた午後のワークショップでは、R. Sarison氏とC. Garfinkel氏の“Engaging the Shadow”に参加した。ドラマ的な遊びを用いてタブーを表現し、各自の影を探索するというものであった。各自が自分のネガティブな特性（サディスト、破壊者、非常識など）をシールの台紙に記し、それを胸に貼った。そして部屋を自由に行き交い、それら特性をもつ人物になりきり他者と交流した。

夕方には総会がもたれた。R. Emunah氏、R. Landy氏、D. Johnson氏、G. Raucher氏、S. Snow氏らといったドラマセラピーを代表する蒼々たるメンバーとドラマセラピーを学んでいる院生達とが登壇し、ドラマセラピストとして各自が目指すあり方について語った。Emunah氏が教え子達をchildrenと称し、“Children teach grand children. It's great.”と述べたことについては、セラピストの教育に携わる評者自身、非常に共感した。総会に引き続きレセプションがもたれた。軽食を囲み、大御所のドラマセラピストから学生までの多岐に渡る人々が互いに親睦を深め、楽しい時間を過ごした。

最終日の3日目はW. McCommons氏とM. Bandera-Hess氏の“Breathing Life into Cognitive Behavioral Therapy Using Developmental Transformations”に参加した。非適応的なスキーマをドラマという遊びの場に持ち寄り、それを皆で演じ共有するというアプローチの仕方が興味深か

った。次にJ. Conover氏とP. Ferebee氏の“Puppetry and Adults with Intellectual Disabilities”に参加した。知的障害をもつ青少年を対象に、パペットを用いて薬物乱用の問題に関する寸劇を行わせるという取り組みをビデオとともに紹介していた。

昼にクロージングセレモニーがもたれた。全員が大きな円になり、この大会での体験を言葉や動きとともに表現するという、まさにドラマセラピー的な閉め方であった。この数日間は、大会というよりお祭りのようなものであった。このconferenceは年に1回、西海岸と東海岸で交互にもたれており、来年はニューヨークで開催されることが決まっている。今度はどのようなドラマが体験できるのか、西海岸での余韻も冷めぬ今から楽しみである。